

美術館からのメッセージ

No. 4

～画家として、 一人の人間としての 香月泰男とは～

画家香月泰男は絵描きとして
もともと手先は器用、工作
は大好き、アイデアは抜群
であった事から、シベリア抑
留の収容所生活時においても
兵隊としてではなく一人の画
家として絵はむろんの事、製
材所から出る木屑・飯盒の蓋
から石コロまで、身辺にある
物でいろんな彫刻やおモチヤ
等を制作されています。



特に復員後のオモチヤ作り
は、画家の立場からあくまで
も『余技』として考えられ、
日常生活の中から出された廃
物や板切れなどを利用して人
形ではサーカスや音楽隊など
を中心に動物や昆虫等々を数
多く作られました。これらの
作品群は大変ユニークなもの
があり、また画家香月泰男の
真の人格が伺えるのではと思
います。

今、これらの作品展示の内
容や方法が検討されていると
ころで、開館が大変楽しみだ
と思います。!!

生前画家は、「香月泰男の
おモチヤ筐」という図書を出
版され、オモチヤ作りはあく
までも『余技』であると書い
てあります。しかし、出来上
がったオモチヤの一点一点に
は自信が伺えます。それは次
の『後記にかえて』の中から
もそう思われるのです。

『香月泰男の おモチヤ筐』より

―後記にかえて―

人間から見捨てられたもの
達に、もう一度人間の関心を
与えよう(一寸表現がオーバー
か)とした。

本当は、こんななかば時間
つぶしか、気分転換くらいに
作った物をすすめられたと言っ
ても本にするほど身のほど知
らぬことである。

しかし考えようでは芸術と
呼ばれているものが、その創
生時に於ては一種の遊びか、
戯れから生れたと思われる。
遊びながら形のあるものが出
来るので、ついついこんな数
になつて我れながら驚く。

作るのは主として冬の間、
仕事場のストーブの側で作っ
た。あんがい本業の制作より
熱が入ったかも知れん。作る
時は何も無我の境地ではない
が、刃物を使うのでくだらぬ
事は考えぬことにしている。

仕事中はタバコは無用だか
ら健康にもよい。余技と言わ
れるものだから他人にも一寸
威張って見てもらえぬ。

つまらぬものでも、「私の
一生の一瞬を費して作った」
もの達である。

18・9・70 Y.KAZUKI

町民文芸

俳句

清風句会

(七月) (五十音順)

山おろし風がもたらす風鈴に

上利はな女

峠道いつもの木かげ納涼す

岩本さつき

海峡の真下地下道涼みみち

因藤 兔史

大手虫背を波立てて道よぎる

上田 雪子

梅雨なしの北から届く大惨事

木村 智子

川風にゆかたの糊の匂いけり

高崎はま子

みつかりし毛虫を神の罪で焼

藤沢 忘帰

毛虫焼きその棒までも打らな

てぬ 松田 妙子

故郷の母夏服に添え菓子届く

松永 保代

水面を薄紫の布袋草

松浦 嘉子

作務僧の手を合せをり毛虫焼

く 宮垣 鶯女

選者追吟

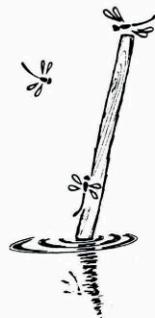
夏草や廃車の山が錆をふく

佳津美

短歌

三隅短歌会

(順不同)



折り込みの白き裏紙メモにし
て短歌のきればし文字にして
みる 立間 雅子

吹く風にふふめる雨を降りこ
ぼし重くゆらげるあじさいの
花 平川 育子

「真砂なす」とよみし子規の
歌思い出づひとつ輝くあけの
明星 山中 敬子

早苗田に光さし込むその中を
白鷺の群の餌をあさりおり
梅雨晴れの午後の日の中行き
づりの人さわかかな香り残し
て 松野美津子

戦傷の心はうざき身は老いて
終戦の日を又も迎うる 堀 光太郎

鬼ごっこの子らのごとくに楽
しげに青田疾りて風渡りゆく
格子戸にほのかに光る螢いて
灯りつけずに闇を楽しむ 村田 敦子

河野真理子